

彦次郎の仁王田

むかしむかし、正直で、おやくしさまへの信こうが、大変にあつい、彦次郎という百姓が、おりました。

ある年の春、彦次郎の家では、子供達が次々と流行のやまいでなくなり、妻は長い間おもし病気でねたままとなり、彦次郎も健康がすぐれず、ねたりおきたりの不幸が重まりました。そして、よそでは田植えも終わったというのに、田の代かきもできない状態でした。しかし、こんな時でも、彦次郎はおやくしさまへの日参を、できるかぎり欠かしませんでした。

そして、ある朝、「こんにちは、こんにちは。」という、元気な声に、彦次郎が、健康のすぐれない、おもし足どりででみると、身の丈六尺（約一・八メートル）はある、くつきような若者二人が、「今日は仕事の手伝いにきました。農具をかしてく